

⑧ 『雪の笠』

十日余りもゆつくりと打ち解けた時間を過ごしさせて貰って膝の怪我はすっかり良くなった。

寢床を抜け裏庭に面した障子を開けて、矢張りそうか、と得心した。目覚めた時の不思議な静寂は、羽毛のような雪が周囲の音の総てを消して降りて来る、音の無い音だった。

手入れの行き届いた庭が、ほのかな雪の明りに浮かんで見えた。

今日は十一月の十八日。(新暦一月六日)本願寺では二十一日から、親鸞聖人の法要が七日間に亘って営まれる。

報恩講に間に合うには、今日の内に出立する必要がある。その事は、昨夜のうちに六左衛門夫婦には伝えてあった。

旅支度を整えているミチの傍で、女房のセキはしきりに雪を心配した。京から先は雪が深い。この時期美濃へ行くのは無謀だと言う。

報恩講は二十八日に終わる。その時、京に少しでも雪が降る気配があるならば必ず引き返すように、と何度も何度も念を押した。

接客を終えた六左衛門までもやって来て、これから当分雪空が続くに違いない。法要が終わったら直ちに引き返すように、と今迄とは違った厳しい口調でミチに約束をせまった。

幸い、明け方の雪はやんでいた。だけど、このまま晴れる様子は無かった。空はどんより鉛の色をして重かった。

ミチは夫婦のほっこりと暖かな気持ちを胸に、その鉛色の空の下を淀川に沿って京に向かった。

降るといけないからと無理に着せられた蓑が、歩く度に乾いた音を発

てた。

六左衛門の予想は当たった。暗く垂れ込めた空から、綿かと思まがう雪が降りて来た。笠を持ち上げて空を仰いだミチの頬にも、ひとひらふたひら、ふわりと止まった。

辺りがにわかにも明るくなったようだった。それは、真白い雪の量が増したからだ。たちまち行く先の視界を奪い、笠の上にも積もり始めた。

急ぎ足で歩いて来たミチの気持ちを、降りだした雪が、尚、せかせかせた。

先ほどまで見えていた、川向うの林や畑はおろか、川面の様子さえ、降る雪の壁に遮られて見えなくなった。すれ違ったり追い抜いたりして行く人や、荷車の往来が急に慌ただしくなった。

荷を満載した車が、大きな掛け声と共に次々にミチの脇を追い越して行く。人々は胸の前に両腕を抱き、背を丸めて小走りに行き交った。

いつ時のざわめきの後、急に人や車の往来が途絶えたようだった。目をこらしても、犬ころの姿すら見えない。

あれほど忙しそうに行き来していた人達は、一体何処にどうやって消えてしまったのだろう。

ミチは、降り続く真白い雪の壁に囲まれたまま、暫く腑に落ちない思いにとらわれていた。

枚方を過ぎれば石清水八幡宮が近い、と六左衛門が言っていた。もう枚方に入っているはず。今日の内に八幡宮まで辿り着けば京は近い。

重くなった笠の雪を一度払うと、柔らかな雪に足を取られながら、ミチは白い世界に向かって気持ちを切り替えて歩き始めた。

だけど、ワラジの底には、たちまち雪が張り付いて歩けなくなった。張り付いた雪が更に雪を拾い、ワラジの底はどんどん厚く重くなる。

足元に気を取られているうちに、笠に積もる雪も次第に厚みを増して来た。その上足袋を透して伝わる雪の冷たさで、足先はちぎれるように痛んだ。

日暮れまでには八幡宮に着くつもりでいたのに、このままではとてもおぼつかない。体が汗ばむほど夢中で歩いたつもりだったが、かさを増す雪に足を取られて思うようには進んでいなかった。

雪の中で夜を明かすわけには行かない。八幡宮まで辿り着けなかったら今夜の宿はどうなる。

焦る気持ちを知らぬ気に雪は降り続き、辺りを夜の気配が、ゆっくりと包んで行った。

音も無く降り続いた雪が止んだ。陽はとつくに沈んでいた。足元は雪の白さで仄明るく見えたが、見上げる空には、黒々とした底の知れない闇が有るだけだった。

雪が降っている間は何も見えなかったのに、雪が止んだ暗闇に目を凝らすと、点々と家の灯りが見える。一、二、三町先にも明りが灯った。その明かりを見ながら、突然ある光景がミチの胸に浮かんで来た。

毎日、日暮れ前に寄ってくれた父が、その日に限って遅かった。

「お父様早く！」とつぶりと暮れた闇に向かってミチは必死で父の姿を探した。利之助の臨終の日だった。

あの夜、ミチの目に映った暗闇に浮かぶ三つ四つの家の灯りは、消え

ない映像となって今も胸の中にはつきりと残っている。その記憶が、目の前の光景に重なった。

利之助の記憶の総ては、心の奥の奥に固く仕舞込んだつもりだった。なのに、知らぬ土地での雪の夜道に、少しでも気持ちが悪く感じそうになった。

ひとすじ涙が頬を伝った。暖かい涙だった。手甲でその涙を拭い去ると、杖を握りなおして再び八幡宮へ向かって一步を踏み出した。石清水まではまだ三、四里は有るはずだ。

するとその時、夜の闇を震わせ暮れ六つの鐘の音が聞こえて来た。静まり返った空気を揺らして、いつまでも消えそうにない重々しい音だった。

ミチの胸の中に明るい灯がともった。行き暮れかけたミチにとっては救いの音色だった。

「五町ほど先かな？」と見当をつけたミチは安堵の胸を撫でおろした。今夜はあのお寺に宿をお願いしよう。

本願寺での報恩講は、全国各地から集まった僧侶や門信徒を集め、巨大な御影堂がはち切れそうな熱気の中、七日間に及ぶ法要が行われた。

堀川通りに出たミチは、京の底冷えに思わず身震いをした。迷っていた。このまま美濃へ向かいたいと思った。そう思いながら空を仰いだ。

空は、薄い雲に覆われてはいるものの明るかった。遅い午後の陽がその薄い雲を透かして滲んで見えた。

往來の激しい通りの雪はすっかり消えていたが、家々の屋根や塀の陰

にはまだ雪が残っていた。

ふと、枚方で難儀をした雪道を思い出した。ミチは矢立を取り出すと、浮かんた一句を急いで書きつけた。

『報恩をおもへばかろし雪の笠』

続々と山門を出て来る人の群れを横目で見ながら、ミチはまだ迷っていた。京から中山道を行けば美濃まで三十里、僅か三日の旅だ。空の様子に雪の気配は無い。

はやる気持ちをなだめるように六左衛門の言葉が思い出された。

「報恩講が終わったらすぐ難波に引き返すように」

そして、思いがけない縁を貰った六左衛門夫婦の、暖かい気持ちも裏切れない気がしていた。

意を決したミチは、難波へ向きを変え、もう一度わらじの緒を締めなおした。心の中は七日間の法要に満たされて暖かい。この暖かさを六左衛門夫婦と分け合おう。

暖簾をくぐると、帳場に居た六左衛門がはじけるように立ち上がった。傍の丁稚にセキを呼んで来るように言いつけておいてミチの前に進み

「もう帰って来んのかと思うてた」といかつい顔をほころばせた。

奥から転がるようにして出て来たセキが、「良かった」と言っつて道の肩を抱きもう一度「良かった」と言った。

わずか十日ほど前に別れたばかりなのに、ミチの胸に熱いものが込み上げて来た。